

小説

井上 次雄

杉山 啓志

選

特選

該当なし

入選

該当なし

佳作

彼岸花の茂れる地

西今町
野村真吾



《総評》

小説部門の応募は一作品にとどまりました。審査員二名が真剣に読ませていただき、観点を変えながら協議をしてまいりました。その結果はご覧の通りです。

来年度以降、小説部門に応募される方が増えることを願いつつ、初めて小説を書こうとする方でも読者の心を動かさしめる作品に仕上げるコツを紹介して「総評」に代えます。

小説の要素は、①人物、②状況、③筋、の三つです。この三つが読者に生き生きと伝われば半ば成功です。

彦根市民文芸作品の小説部門の応募規定では、四百字詰め原稿用紙に換算して十枚以上、三十枚以内で書くことになっています。この枚数では、複雑なストーリーを展開するのは無理で、登場人物も数名に限られるでしょう。その条件の下で、あなたにしか書けない小説を書いてみてください。

とくに、主人公の人物像を造形することに全力を注いでください。その人柄が読者の脳裏に浮かぶように書き込んでみましょう。読者はその人物に感情移入して読んでくれます。

物語の語り手を誰にするか。作中人物のひ

とりが語る、という方法がよく使われます。漱石の『吾輩は猫である』では猫が語っています。作中人物ではない誰かが語っている小説もあります。小説の内容に合った語り手を決めて取りかかってください。

題材は日常のちよつとした出来事や、何気ない会話の中からも見つけることができます。こんなことが起こったら面白いな、というような思いつきでも、じゅうぶんに小説の種になります。大事件が無くて、特にすぐれた人や奇人変人大悪人が登場しなくても、読者を楽しませる小説が書けます。作文のように、自分が体験したことをそのまま書くのではなく、虚構の世界を創ってください。

文章を書くにあたっては、平易で明快な日本語を使いましょう。「文学的表現」や「名文」が求められているわけではありません。「流石に」「専ら」など、今では一般的に漢字で書かなくなっている副詞があります。読みやすく書きましょう。

一文（センテンス）がだらだらと長くならないようにしましょう。長いと、伝えるべき内容や論点がぼやけたり、読者に無用な負担をかけた結果になります。

時間・場所・観点が変わったら、改行して新しい段落にします。このことは言葉では説明しにくいので、実際に一流の作家の小説を

読んで習得してください。新しい段落は一字分字下げします。

小説を書くうえでさらに大切なことは、あなたの小説を読んでもくれる人を常に意識することです。「思いのまま書きたいように書く」ではだめなのです。自分が書いていることが読者に正確に伝わり、読者の感情を揺り動かしているかどうかを、よくよく考えながら書いてください。思いついたことを書き手のペースで次々と書き連ねるのではなく、読みの心の心にしっかり届いているか、読み手の胸の中にちゃんと納まっているかを、いつも考えていてください。書き手だけが独走してはいけません。

以上のことを心のどこかに置いて、まずは一篇を書いてみてください。来年度のご応募を今から楽しみにしております。

杉山 啓志

